季寄文台月令博物筌　三月部　三

三月部目録

△所あるい能僧の李を持物へ
○養生の法○雨風の考○米乃豊凶○物産その外人家重宝のこと
虞々ホ数多あるゆへ目録ならんとおもふさず

三月 桂 月七 陰物生 異名並註 謝子 初丁
△清明節 七十二候 六丁
△花の期を知 二丁
△穀雨中 七十二候 三丁
△花盛の期 四丁
△八十八夜 三四丁
土用 月天氣 三四丁

三月日令 此部ハ三月日の定まる事支の定りなくこゝにあらざる
△来子 蚕 五丁
△松尾明神御出 五丁
△御蓋牛奉 五丁
天王寺供養 五丁
△上巳節 五丁
△鶏闘 鶏合 五丁
△鰤曾 桃花節 五丁
△重三 曲水餘 桃花節
△桃の酒 六丁
△柳ひなつゝ 六丁
△菱の餅 六丁
△草餅 △蓬餅 △女子餅

△己日板　七丁
△曲水宴　三七丁
△次ノ御板　七丁
△雛遊　△ひな祭　△ひなかざり　八丁
△水宴會　三七丁　△巳の字れ水　三八丁
△汐干　九丁
△石山祭　十一丁
△栗津祭　十一丁
三日祝儀文　九丁
△上巳海碩石取　十一丁
△修學寺祭　十二丁
△一乘寺祭　十二丁
△嵯峨大念佛　十三丁
△高麗法花會　十三丁
△稲荷明神御山　十三丁
△吉野會式　十三丁
△天台礼拝講　十三丁
△善導御忌　十三丁
△十本大念佛　十三丁
△勸学會　十三丁
△梅若祭　十三丁
△石清水臨時祭　十三
△水尾祭　十三丁
金毘羅會式　十三丁
安樂花　十三丁
△善導忌　十三丁
△鎮花祭　十三丁
△園一切經會　十三丁
△土生寺大念佛　十三丁

九日　十日　中午九

十七日　十八日　十九日

△江州比良祭　十四丁
△人丸祭　十四丁
無縁經修行　十四丁
釈迦御身拭　十四丁
ひんざいの神事　十四丁
△御影供　十五丁
△高尾女詣　十五丁
△爐閉　十五丁

月令　此部ハ八日ノ三月ノ月令ノ事ヲ

△順峯入　十五丁
△花の縁　十六丁
△小弓弓　十六丁
男女衣服式　十六
時衣　△さくら衣　△やまぶき　△重　△山吹衣　十六丁
△寒食　十六丁
△春限　△春の湊　十七丁
△暮春　十七丁
△忘霞　△名殘の衣　十七丁
△三日尽　十七丁

月令　此部ハ三月ノ月令ノ事ヲ

時令　此部ハ三月の時候ハ

草木　此部ハ三月一ケ月ノ草木ノ事ヲ

△花　△桜　△櫻　△櫻田　△山桜　△家さくら　△花見　△催　△花見ノ催　△庭桜　△花盛　△花見ノ宴　△花見ノ酒　△花見ノ法　△花見ノ作法　△花見ノ正式　△花見ノ大事　十七丁

三月目録　二

△花見酒　△尋花　△花ざかり　△落花　△花ぐもり　△殘花
△海棠　白蠟　海棠　△桃の花　桃類　廿二丁
△李の花　廿五丁　△楊梅花　廿六丁
△杏の花　廿六丁　△蒲萄花　廿七丁
△林檎花　廿七丁　△東花　廿七丁
△梨花　廿七丁　△木瓜花　廿八丁
△木蓮花　廿八丁　△胡桃花　廿八丁
△辛夷花　廿八丁　△ぼたん　品類　廿九丁
△映山紅　卅丁　△藤の花　卅丁
△月季花　卅一丁　△石楠花　卅一丁
△沈丁花　卅二丁　△山吹　卅二丁
△小米花　卅三丁　五味子　卅三丁
△木通花　卅三丁　天南星花　卅四丁
△今ゝ法　卅四丁　△春蘭花　卅四丁
道灌草　卅四丁　淫羊藿　卅四丁
△春菊　卅四丁　△東菊　卅四丁
△桃花　卅四丁　△櫻草　△九輪草　卅四丁
△海老根　卅四丁　あらせいとう花　卅四丁
△丁子草花　卅四丁　△仙墓萩　卅四丁
△華曼草花　卅四丁　△碎米薺　卅四丁
△母子草　卅五丁　△小粉團花　卅五丁
△馬酔木花　卅五丁　△蘇枋花　卅五丁
荷花紫草　卅五丁　△白菊　卅五丁
△菱花　卅五丁　△馬藺　卅五丁
△ほのさゝ　卅五丁
海金砂　卅五丁　△菫　卅五丁
△金盞花　卅六丁　△棋盤花　卅六丁
黄精花　卅六丁　△三月大根　卅六丁
△揺桃花　卅六丁　△梅の若葉　卅六丁
△きの芽　卅六丁　△菖蒲　卅六丁

△三月菜 四十六ウ
△蕗 四十六ウ
△櫻のり 四十六ウ
△かぐら菜 四十六ウ
△若菰 四十六ウ
△胡葱 四十六ウ
△茶摘 四十六ウ

三月生類 此部ハ三月一ヶ月ノ内ノ生ものゝ名目ニシテ

△呼子鳥 四十七ウ
△コヲ残る鶴 四十七ウ
△鷽 四十七ウ
△櫻貫 四十七ウ
△若鮎 四十七ウ
△汲鮎 四十七ウ
△青饅 四十九ウ
△麥鶉 四十七ウ
△雲ヲ入鳥 四十八ウ
△蛤ホドル 四十九ウ
△櫻鯛 四十九ウ
△柳 四十九ウ
△上リ粱 四十九ウ

三月必用 此部ハ三月ノ間ノ風雨ノ占○破戰ノ方○日取ノ吉凶○他行ノ心得○作事ノ方○料理献立ノ法 食物ノ好悪等其外品々アツムル九日ノ定ル事ハ口ノ日今ノ部ニアリ美ハ日ノ定マラヌ三月一ヶ月ノ要用ノ事ハ此ノ部ニアラむ

三月之部

△卯ハ季ト持ツ物ヲ用ルナリ

今月百花咲やとゝろび遊賞するふなくゝう人間の故障あるハ風雨明日の事ゝろ心ぢなまあゝバ山野ヨあそびて情をのぶべ

○五陽ハ三月ノ異名○沢天夬ハ五陽長ゝ一陰消する意夬ゝハ去るの義ゝ

異名 季春 中姑 春晩 禊月 蠶月 暮春 殿春 五陽 鶯時 竹秋 春末 春杪 残春 春 嵯姑洗 弥生 花見月 櫻月 春惜 み月 花津月 夢見月 志ゆいろ月

異名註○季春ハ三月ノ名ノ○中姑ハ中ノ名ノ○ゝろゝ。禊月ハ上巳ノゝゝひする月ゝれバかゝいゝ。蠶月ハ

かゝる依る月といふ事あり○暮春はたるの月○殿春はたるの月去
春はたるの月○殿春はたるの月去
んぬりと云音○五湯は註ふあり
鶯時はうぐいすとのなく時○竹秋
たけなおの時あれば〳〵○春末はたれば〳〵○春杪はたるの
るのすえ〳〵○春杪はたるの
れくれ○残春はのこり多はたる
といふ事なり○春帰はたるがか
へる〳〵○姑洗は姑は古なり洗を
あら〳〵へ万物皆ふるゝと去りて
あらしくあらけ義なり○弥生
い春の陽氣いよ〳〵うて萠へ出る
草もこのゝいよ〳〵生ひさうん
なれいやあひ月といふこゝ紙暑
してやよひ〳〵なり

哥 秘藏 さとあさ月

古へはるもみさはく鶯なり
さとるさ月はいまやなり出る

莫傳 花津月

花津月 花津月の後の名のあり

ひあ〳〵くれの神あれぬへ

藏玉 さ〳〵月

なべて今さかりとなんて梯月
うすくのうあるは方の山へ

莫傳 夢見月

さゝらるゝ夢の山乃夏月
嵐のさるれ雪のあり風ぜ

藏玉 花見月

うちとくのうゑもひとつのむ見月
あべてちゝもあくゝ迄めん

節 ○立春○七十二候○草木七十二候
○昼夜長短○日出入等左之記を

此項萬物業
生ず清
淨潔明
るゝて
ようて
ぐ
山川
草木

桐華薔薇此ごろさく多一書ふ
玄鳥いたるとあり木筆いこぶ
あり虹始て見ゆこのころ雷
あり是寒氣ふるひて雨氣あり
しかくも虹のいろと不成すく虹ハ
雨氣ふりの映ぜざるゆえ一書ふい
鴻雁北ゆくあり北飯る節候
○此節より雪なし

雨ふりてあるようまへ晴るまへハ
早蜜収る昼より後晴るまへハ
晩蚕収る○風東北より吹ハ月
末ゟ至りて米の價貴し東南
より吹ハ中旬ゟ米價貴しと云
ども月末に至ては賤し西南ゟ
吹ハ月末ゟ米價貴し西北ゟ
あけぬ中旬ゟ米價貴し

節花期知

年の寒暖ふるとい
へども此頃桃の盛
あり伏見桃山模津稲田其外
九此前後ふさ〳〵櫻も二重あるる皆

さくあり彼岸櫻ゆゑ殊更早し
名木八重等ハ遅し中穀雨の頃ゟ

今日辰の時雲のゆく方角を以て年中のことをあらべし

清明日偶題　王世貞

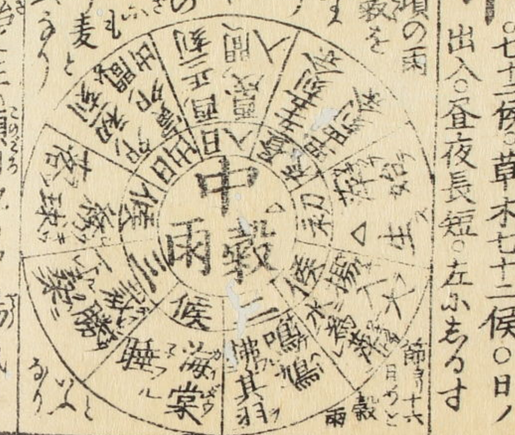
穠李夭桃名闘新　李ト桃ト遊ニ名花ヲ爭テ新ニ競ヒ勝カリスモ
開ケリ傷心眼底上墳人　今日ハ寒
人墓所ノ掃除ニ行ヲ見レハ
無常ヲ感シテ心イタマシキコト
生憎介子成寒食破損風光一
日春　風光ハ過スユヘ介子推
ヲ怨ムルトイフモヤハリ子
推ヲアハレムナリ　介子推トイフハ唐ノ忠臣ナリ

妙術

去樹虫法 今夜子の刻樹木の上をこしらへてそこへくべしけむり生ぜんとを取りて稲の毛と煎じて泥土をふり屋内門戸の孔穴を塗きれば蛇其外一切の虫家の内ハ今事ふり月令廣義ハ出ようう

中 ○七十二候○草木七十二候○日ノ出入○昼夜長短○左ハもろすすき

此頃の雨百穀を生ずよりの名づ俗の諺もあり麦とりよりう



萍始て生ずの頃日池の中陽氣ようやく蒸して草生ずと一書ハ散ずとも芦ともあり揚萍成鳩鳴羽拂も春の陽候なり一書ハ第二候ハ牡丹華さくとあり裁勝とハ百舌なり桑ハ下れる繡球ハ櫻桃なり

治熱病法 今日茶を炒て蔵め置き此茶と煎じ呑めバ疾嗽百病一切の熱病を治をるなり

花盛期

吉野山ハ山上ハ遅く山下ハ早しとへども中より七八日前と盛さす京智恩院祇津鷲尾山ハ八重九重の名木ハ此頃なり御室鞍馬八幡等ハ今五七日も遅し

八十八夜

立春の節より八十八日めにあたる俗説ハ名残の霜くいハ春の氣終て夏ハ火氣に変化するの節なれば霜も此頃よりなくなるといふなるべし此ときは

霜降まゝ草木のうるゝを損をかゝて其ふせぎをなべし

○綿をまくい此前後なり八十八夜の前ゝ四月五日までまくなり

土用

一年四季ふ土用を合て一季七十二日づゝして三百六十日なり土用い中央にて信を守り四季春木夏火秋金冬水の間ふ配ゝて十八日三分づゝ十九日の事あれども刻數ていやゝ十八日三分なり三月節ふ入てより十三日め土用の入なり夏秋冬國是

土用天氣

土用の内西北ゝ吹ば晴ゝ八日の中雨多然れども北風吹出せば晴る南風いまゝべて雨ゝなる○雨ふりつゞくゝも北風ふき出せば雨晴るゝゝども三四日の中又雨とのよふを東風ゝそゝ降ゝ時い晴ゝ東ゝく土用い常の天氣ゝ異ゝ

日令

三月日の定りなる事支の定りなる事記す

午ノ日 **来子** 桑蠶蚕今日蚕を初て来ふ付るなり

上卯日 **京** 松尾明神御出七日の間御旅ふて洛楽の能あり

朔日 不成就日 **天氣** 晴天い五穀ふあらしい人病事多ゝ○大風吹い病多く草木虫多ゝ○北風吹て朝より未の時ふいなるまで止ざれど米價貴ゝ

江戸

紅毛人迦毗丹筆 二日 **天氣** 者外療登城

今日雨あれば早ゝなる **大坂** 天王寺經堂の經供養

三日 **養生** 今日夫婦の交とぶす **占** 今日風ふけば梨樹ふ虫ゝず雨あれば来の来あゝし和

みはう〜夜ふ入　蛙なくらんい早つき

北斗に奉る

むらい北山の高き峯に火を燃て北辰に供ぜらるきけるとうや今い御殿の北向ふ御座をしきて御拜あり

御燈

闘雞

禁裏ふて朝十番の闘雞あり　今ふも是を行なく事ゝや

朱雀院の

(能)炭くの声ゝ分らんて梅とつゝてあまう式　幽調

(狂)雞も相撲ふ似くうあゝ坂の関のかちゝあぐる　粉ひ淡路守宗増

上巳節

上ハ初の儀ゝ初の己の日を以上巳の節ゝ後世三日ふ定しゝ奥の己の日も三月ゝ抜ゝ所ゝ記ゝ重三月

△曲水節　△流觴會　△執蘭。蘭と水上にうて不淨と

後際する事詩経の鄭風ふ見ゝ

△桃花節　唐の世ふ三日と今節ゝるづけ　本朝三日を桃花の節ゝいゝ

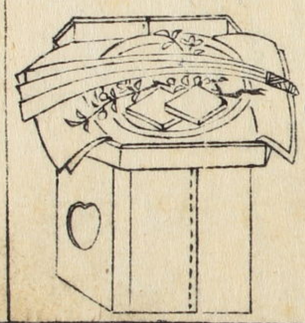
桃花生王澗　杯巢暗金溝

右の詩事文類聚上巳の処ふ出ゝ

生花式正

○桃○抑○やまぶき等をいけべし

三月三日
三方
諸禮家
本式



夫木

我ぞうあくまで花ふ殘ふ咲てよりくのきゝをうるれも　為家

新撰六帖

桃のうる咲や弥生の三日れ系ゝの浪うゝも今さうゝ　光俊

(能)桃の見や武紀ふ扇うこ紀和　五川

一曙やゝに桃花の鶏れゝ云　其角

柳ぐら 今日初て髪ふ挿へ

桃花酒 今日

酒ふ和て呑と月令廣義ふあ也
ふと其能とく瀉下す殊更千葉
花を服もれを嚥出てやまんと
本草ふあれい呑べくばくてし
ふそへてかざりん事こと風流ぶる

公朝

(高) 夫木

天の川そこへの桃や咲めらん
そさへ花のふ色ひあるひめる

(俳) 盃ふ桃の花やうかべ
入れ千ばの砂ふい我やり酒 百之

(狂) 砂人のふげるく斗りうて
うやをれのふへりく桃の酒 立圃

草餅 蓬餅 菱の餅 母子餅 龍舌餅

蒸麸の汁と取餅と

と名づく今日食とる事唐ふも
あり本朝ふも文徳実録ふそこ
草の餅を用る事あれい古へい
是を用ひしとうよ艾也の餅と

物ふれい中世とり用るとくそへう
(俳) 嵐の茅てもめづらん艸の餅 嵐雪
(狂) 加賀もあるべきふを繼ふ
蓑のりいおいい祿ちさるの好
阿ふ粉も蓬も入て拵とう
はく寄もちんぐとひ一ぬち行鼠

己日祓 水辺ふて祓して疾病を除くまじとを

是周の世ふそ始を魏の時
とう三日と用る事い當月辰の月
己の日と用る事ふ本朝ふ
なまじ己を除日とふく
も古代い己の日と用ひ雄黄
帝元年上巳日清苑ふ御幸あ
アリー事日本紀ふ出とう
(俳) 打ふあそ花や己の日ふ宗因
あるもむあるく己の
日ふうくかみ嵐方

須磨御祓 光源氏須磨の浦ふ左遷の時
陰陽師ふ仰せて御祓しなま

つゝ舟ふ人ゞさとはなつ　曲水
てみゞゼ〜事あり

曲宴　水宴會　周漢の世ふ後
盃を流とを〜曲水の
の事多く出しゝば唐ふも久し
きことなるべし川の辺ふ道選
して流水ふ杯を浮へ其杯の我
が前と過ざる先に詩を作て後
杯とゝろ呑ゝる事く本朝ふハ
顕宗帝の御宇ゝろ始まれり

(哥)　草庵　頓阿

石ゐ水の花の雲まそ春ゝ
まゞゝのそいかれもみゞさに

夫木　後京極摂政

ちる花をゝゝの園居ぬ春そ
ゐゝふ絶べゝ春乃さろづき

同　定家

かゝ人のあ紙つゝみゝの
ゐよまゝゞみゝもさにゝろ

(詞)　みゞす亜。ゝゐけゆくゝゝゐ。
ゐゐゞす。いゐ。浮ゝ亜流ふあゞみ

(俳)　曲水ふのきらゞい茶碗が蓑

(狂)　花多ニトゆくあいさろうきも
うゝゝ生ゝろ桃

巴字水　常楽菴

の花今い常楽菴
句ふむゝゞ三日三月三日ふ限ゝ〜
曲水の形巴の字ゝ朗詠ふも
出ゝろ〇水成巴字初三日。三
月三日と初三といゝ。源起周年
後幾霜。周年といめゞる年月
といゝ周の世ふゝゝて作ゝろ
周公旦洛邑ふて曲水の宴と始
ゝろ〜ゝゞ年月とゝろゝと

(哥)　夫木　定家

かゝゝゞ巴のゝゐれゐい祐ゝて
ゝゝのゝゝ日ゝる春のゝろ作き

(詩)　曲水之詞　王昌齢

雨歇楊林東渡頭永和三日盪
輕舟春雨コヽロヨク晴テ舟ヲ
ヨレテ棹ノフタリニ鷗ムク
故人家在桃花岸直到門前溪

水流　今日志ノ行サキノ友ダチノ家ハ桃花ノ咲ク岸バタニアリテ浮川ノ水ガスグニ門前デ流テアル所ナルゾ

詩　曲水五字對句

畫笥新搖浦溆　故事修春禊
春服滿汀洲　新宮展豫遊

同上

詩　同七字對句

詩礎

烟開蘭葉香風起　白鳥飛
岸夾桃花錦浪生　引飛觴
泛觴遲
曲水鄉心万里餘
和春色千年在　舞鳳樓

雛遊　雛祭　雛飾　立雛　紙雛　遠天皇二年ニ始ル　雛ハ穢ノ具ナリ身体ト母子雛ニテ撫テ水ニ流シ凶事ヲ除クナリ

○又雛ハ人ト鳥ノ子ノ惣名ナリ小女是ヲ弄ブ

内ヲ守ルノ教ヘアリ昔ハ常ニモコノ事アリ近代ハ三日ニ限ル即李ヲ特ク

能　しどろもどろの舞　孫ハ小孟其角

狂　鉄ハんとむきつくの事ものこそ　白柳

詩　上巳看花　明楊基

東湖東畔柳絲長滿苑飛花亂
夕陽　湖水ノ川畔ニ柳ノ條長クシナダレ夕日ニハ花チリ
亂ルヘケレ何處祓除兒女散過來
流水尋金香　弥生ノ祓ヘ事スンデドコノ児女カ
ムレテチリぐニ家ニカヘルトホリスグル水ニデガ衣裳ノトメ木ノ
二ホヒウツリテカホレリ
又油花トノ故事ニモトレリ

詩　同　劉得仁

末敢分明賞物華十年如見夢
中花世間ナミニ節句ヤ花鳥ヲ楽ムコモナク十年バカリ

ハウレイ多クウカヽクト遊ビ人過盡花ヲミルモユメノコトシ

衡門掩獨自凭欄到日斜風景ヲ愛シ流鶯ノタメニ遊ビ来ル人スギ去リツキテワガ家ノカタオリヲモ戸ザシテ只ヒトリラン三ヨリ彼レコレトオモヒメグラスウチニオボヘズ日モタムクナリ

汐干

三月ハ海の潮太かくとゝろ

○江戸芝浦品川○大坂住吉浦○泉州堺浦○上花硯石取○其外諸國汐干の處多〳〵爰ふと畧ス

家隆

あいざ〳〵ハ汐干ぬるも何ゐるゝん
浜のあ免ゐ見めゝ〳〵袖を

夫木

師光

伊勢の浦清なるなぎ詠めて
郊のつゝ小貝やひ〳〵らん

詞 震ハゝゝ春の浪ぶを袖風にくゝる。ゆけてゝ
の濱あゝ紅貝ひ〳〵ふ。ゐひ〳〵

俳 徳川戸紗撥あむにゝ戸汐干 貫十

月も日も二の浦あゝ汐干小 康吉
親ゐ〳〵む坪目とふゝ汐干小 其角
蛤ふたきゐゝ汐の引ゐる 移竹
釣〳〵てゝゝゝ足ゐゐと汐干小 十磨
狂 伊勢やひ〳〵ゐ浦ゐ汐干潟
浦かゝゆく私とそゐ〳〵 常春菴

三日妙術

俳諧虫法

今日蕣の花を竈乃上又ハ庭
糸の居間ふ志けむ〳〵
ゲ碎ゐる事〇苦楝の花ゥ
を〳〵花ゐくハ葉ハてもゐゐて
臥房の下ハ〳〵ゐ蛍志〳〵と
碎ゐゝ〇今日又ハつちのへ辰の日
に莽の花桐の花芥菜を衣服
の中へ入をけばむ〳〵ざむ事ゐ〳〵

面の光沢を出す法

今日桃の花を
採て收め七月七日に雞の血を取
て二味和〳〵匂へて毎夜ゥれば
ゑべ〳〵三四日ふ至て顔色ぜゝと出
老ゐるもゐかゝ見ゆゐなり

(狀) 賞上巳之文 真字ハ尺牘多リ

一色紙上巳ノ文 修禊 尺一 簪筋 平

勝ヲ成ス所ニ 安 可嘉

佳ヲ賦ス 催

海魚 二種 供雙魚 雙魚

上巳ニ佳ノ 祝 上除之辰

式斗多ク上ル 幸標入 焉

(尺牘) 上中下書簡

供雙魚 (上) 献海鱗 (中) 送溪魚 上

除之辰 (中) 上巳佳日 (上) 拔禊令辰

(中) 蘭亭會日 幸標入 (上) 伏見鑒

納 (中) 勿誘其不典

三日 故事 踏青鞋履 唐士ノ俗 士女子野

遊スハ ヲ云フ 祈社 女巫水ニ臨ンデ祓シテ邪病ヲ除キ

福ヲ祈ル 風俗通ニアリ 祓潮 武帝位二即テ

数年子ナシ平陽王良家ノ子ヲ十人余リ美麗ニシタテハカヽヘヲキ武帝ノ覇水ノ上ニ祓シ玉ヲ皈リニ立ヨリ玉フヤウニセシト漢書ニアリ其外祓潮金堤石壇ナド皆今日拔セシ故事多シ

蘭亭 晋ノ王羲之會稽山ニテ詩人文人ヲ集メテ酒宴ヲ催シ禊ヲナセシトアリ蘭亭ハ亭ノ名ニ

油花ト 唐土ニテ婦女蘸ノ花ヲ油ニ点シテ祀リヲナシシヲ水ノ中ニ蘸シテヲル二若竜鳳花卉ノ狀ヲナセバ吉ヲ得ルトス

近江 △石山祭○京来ハ朔日より三日まで日々種々の式法あり
今ハ朔日ハ新宮大明神近津尾八幡宮両神輿新宮の拝殿ハ出御なし神楽あり三日両神輿三十八所明神の拝殿ハ渡御あり て衆徒集まりて法楽の奉幣あり御酒と奉りて後神輿還幸あり

栗津祭 江州鳥居川ハて大友皇子の霊を祭る今絶う

京 ○加茂神事 三月三日あり △洛北静原祭 右ハ同じ

土佐海硯石取 土佐國の海辺ハて三月三日干浮ハ海中の石を取りてこれを硯ハ作るハ至て佳なり

四日 (俳)古里ハ雪そで 井魚
と用ゐ古来ハ二月二日て出船ありやおさまるハ今日 嵐雪

出船 當時ハ今日

五日 **養生** 今日もべて物の血を見ること ハいむ

京 ○建仁寺開山忌○高野村祭 △修学寺赤山明神まつり △来寺祭まつる神三社あり一ハ八大天王○二ハ比良貴天皇○三ハ多天皇

六日 **妙術** 今日桃花を採てたくハ へるハよし ○今日井華水とりて沐浴をれハ厄病のがるゝ

京 一乗寺村天王社ハ能あり

七日 今日齋 成沐浴 **天氣** 今日南風あハ五穀ハ忌 夏旱ハ北風ハ雨ゑハ豊年ゑ

大和 菜師寺寂勝会 今日より七日の間寂勝王経を講ずる

信濃 ○下諏訪大明神祭例年 今日鹿の頭七十五を供ず氏人の内何方ハ集まりの事増減なし 右の内ハ両耳ハ ハ不思議のことなり

八日

京 泉涌寺開山忌 **大坂** 住吉大嘗會○天王

寺ようう樂人十六人來りて舞樂を奏し僉人の舞あり

中午　石清水臨時祭。男山八幡宮小有中の午日に南祭と云名高き祭に是將門の亡し亂を鎮め給ひし御報賽ふて天慶五年より始る

上総　中山法華寺千部執行九日より十七日迄　九日就日　不成

京　さゞ大念佛九日より十五日まで　大坂住吉小書會　水尾

祭　丹波國桑田郡愛宕山清和天皇の山陵と祭る　十日　京

高尾法華會　讃岐金毘羅雜會式あり或ハ市と云ふ四日より十二日まで

中卯日　近江三尾明神祭　中午日　參詣群集す

京　稲荷明神御出御旅所西九條東寺建立の時老翁と云ふ稲と荷ひて現ぜ給ふ弘法大師則芝守長者と云者の家を借て入奉ゆゑ其日今月中午に北日と經て四月上卯日鎮座成ふ此例とて今日迎奉る

十一日　京　安樂花。西加茂上野川上村右の三郷より傘鉾及ひ囃子物とゞて今宮の社に群集とゝ

あーやらーひざるーさやす是ハ高雄にて法華會やすらふ花とも終とよといふことかくるやうとう

哥　る雄山のちハ今ハ　西行

ゆきーへ死ん　歌うりの

能　山機もやをひ　春雨

花ど見りのぢ

十二日　京　永觀堂善　大和　吉野會式子守勝手

両明神の神輿本堂出御仁王經修行を導忌。悟真光明善道大師ハ隋の世ふ生まれ唐の永隆二年三月十四日寂

東禪林寺永觀堂又ハ智恩院寺中善導院等ふて修行す　今日ヨリ十日迄

近江　麓山天台礼拜講日吉八王寺拜殿ふて行ふ　今日ヨリ十日ニテ

十三日　京　長講堂後白河法皇御忌　○大佛蓮華王院開帳（縦三十三丈六尺）

十四日　鎮花祭　三輪・狭井・二神ともつる神祇官

まつもとれりる春花のとびらとの頃疫神祓ひぜ〜ほふうくい

京　△善導大師御忌修行あり　△壬生寺大念佛十四日より廿四日まで本堂の前ぞむかう念佛をはじめ有名くの狂言をつくす

（能）声るてくとなるう壬は念仏　滝列　△嵯峨千本念佛。皆疫病の遺意

十五日　京　祇園一切経會　拾芥抄出　今八坂　聖護院の森熊野權現祭　△勧学會　康保年中大内記保胤文道先達の学徒と進めて始りる勧学院は三条の北雀の森其跡（近世四条大宮の西ふうれるとあり

江戸　隅田川木母寺大念佛　梅若祭　吉田少將の男人ふ

欺まて東海ふ越さ病ふかりて死を塚ふ初へ植今ふ至迄大念佛會をはじめ

○浅草第六天祭○下谷稲荷祭○浅草念佛院中將姫法會○芝鹿島御穂両社祭礼隔年ふ執行らるく

諸方　○藝州嚴島會十五日　△江州比良祭昔ハ山門領ゆゑ山王を祭る三社ゆゑ

十六日　黄蜂侵種日　あしと日と　天氣　西南の風ハ旱りを主る風烈〜けるハ弥旱強〜

唐土の人ハ是ふ依て錢百文を軒の下ふかけて風をうらるく風この錢をうゝとくとあるく

されが豊年とゝて其用意をなをなり

旱とゝて又強く動けば

忌旅行　今日遠方へ行事を一ノ巳不慮の難ふ

無縁経修行　昨十五日より廿一日迄摂州中嶽寺

観音野崎観音等参詣臣十八日
観音戒法修行せ〜る〜故なり

十七日 不成就日 江戸 △浅草ぎ〜らの神事

祭礼ある年ハこの義なし〜
神輿本堂ふ迂座法會あり

十八日 江戸 浅草三社稚児祭
丑卯巳未酉戌の
年行わる〜なり。池上本門寺千
部修行今日より九七日まで

大坂 淨光寺観音戒法。
大龍寺観音會 擊尼山と号す

△人丸御影供 △人丸祭 六播州

昔ハ毎月今日内裏の和歌所ふて哥
の御會有今も和哥好ふ哥會

十九日 京 嵯峨釈迦御身代の。如来の告
父の牛ふ生〜と歎き佛果と得ん
為如来と成し衣と牛ふ着せ
より毎年如来と成し白布参ふ奉る

△廿日 諸國弘法大師御影供

大師入定の忌日ふ〜て紀州高野
山い勿論京東寺高雄をそ〜め
国々一宗の寺院ふ法事あり
△高尾女詣常ハ此山女禁制なれど
今日ぞ〜ハゆ〜あり川寄大
群集とるハ江戸ふそ

廿二日 天王寺大子堂法事音樂有

師河原参詣甚多〜 大坂 住吉たが
ねの御影

廿四日 近江 礼拝講十

二日十三日修行廿四日廿五日と新礼
拝講〜云叡山大衆の僑奢と歎て
山王大師昇天ふ成らんと託宣有て神
木黄ふ変ず大衆驚き法華八講を
修行〜神と

廿五日 不成就日 山城 二の瀬山の神祭

慰め奉るなり

大和 南都般若寺文殊会 養生房事を戒べ〜

今日沐浴して身を清くもべし神氣さるるに成て諸病を患へど

廿八日 晦日

近江

比叡山にて山王祭に用ゆる榊とて山王祭に

爐閉

又炉塞ともかけり茶人の炉に始めて火を

茶湯の法十月より今日晦日限り

ふて四月朔日より風炉あり

詞 炭とぞ。春の名残。

俳 炉塞ぐ炉の火の名残れとろ炭

京

千本引摂寺念佛○堂前に普賢像の櫻あり此花乃

開くを期として念佛を執行を

此花九立春より七十五日頃に咲く

月令

此部に八日の定まりなる三月一ヶ月の支を記す

順峯入

春大峯山上とるとて順の峯を入

本山とは聖護院宮御門主天台宗なり當山といへば醍醐三宝

院御門主真言宗なり役行者三十四歳の春葛城を経て熊野を

経て大峯を踏分けゆひしと順の

峯入のそなめとして本山の御旧

格なり春毎に御代参順の峯

入有て順に本山ぞうへ秋を逆

峯とぞ本山當山ともに如此

けなる事七月の處に記す

俳 大峯や分入ぞ

にるいすぐ光雷

花之縁

俗説

小三月と婚姻に忌ひしに○或説

花の淵なりともいふ岸なぐに多

あるといふ○詩経に桃之夭々其葉

蓁々之子于歸。桃の花咲く頃

女子と嫁入する事を爰と以て見

るべし婚礼に忌むべき非なるべ

小弓引

昔内裏にて此事あり

地下にも春の遊びとす

寄 妖怪の移るを怪なる世のうれさふ

裏のあそびにうつるを慈鎮

衣服之正式　綿入と着を稀い柳色多

時衣　櫻衣表白裏赤　櫻重ねて白赤　山ぶきぶろも表黄裏紅　山吹ちりて黄金　しじ衣表青

為明

（詩）續後拾遺

あぶのこちりてよ春のうす衣
ちそも山路よ日数重ねそう

女衣服　白つゝんぢ白ちりめん
の類ふ水山吹り櫻
川ゝいづまとそも暮行くるのも
ゆう金銀ゝくを以て系がきたる
を間着かてひつゝんぢいぢりめん
の類をいぢりたる又ゝ色糸
ゝくれ花のもうれうちりけも
ちゆるゝをゆういあゝも地
面ふを上着ふとべゝ是い
上つゝの式多ゝ四民是ふあゝく

寒食　冬至より百五日も清明の節前二日といめ

此日より清明ふいゝう唐土ふい先祖の墓所を掃除して祭をなと事今日と十月朔日にあり草木初て生する時を以てなう志あゝ人い墓所ふ行て拜掃をべゝ

（俳）寒食やいけるものゝ墓ふ寄ゝ　琴屑
寒食や炭の付うる猫の影　積て

雅雄

（詩）寒食之詞

春城無處不飛花　城下處々春花チリトヘリ
寒食東風御柳斜　春風柳ノ枝ヲ吹ノビイテ
影色日暮漢宮傳蠟燭　今日漢朝ニハ
火ヲアラタメテ諸臣ニ下シ與ヘ
賜ルコナリ日ノクレカタニ新火ヲ
点シテ禁門ヲ出ル青煙散入五侯家　高位
ノ貴人カタ火ヲ賜テ
オノくヤシキヘカヘル

韋莊

（詩）仝

満街楊柳緑絲煙　街ノヤナギ緑ナル絲ヲ見カ
如ノ春ガスミウツリテウルハシキ　畫出清明二

月天 清明ノ天氣イサギヨクキタルガ如シ 是

隔簾花樹動 簾ノ内ヨリ春風ノ花樹ヲ吹キ動カスヲ見レバ 女郎撩乱送鞦韆 禁中ノ女中鞦韆ノ繩ヲ引キ影色ヨシ ノベテ今日ハタハフレアソブ

寒食故事

榆抑火 唐士ノ政年中ノ火ヲ改ル

二榆抑ノ火ヲ用ユ春ハ木夏ハ火ニ屬スル故木生火ノ義ヲ以

今日改ルナリ 論語ニ燧ヲ改ムトアリ

介推 春秋ノ時晋ノ文公ニ仕ヘシ介子推トイフ

賢人ノ燒失シ日ナレバト テ三日ガ間火ヲタツナリ

熟食 秦ノ人ハ寒食ト云ハズ熟食ト呼ブ火ヲ用ヒズシテ

ヨク食物ヲ熟スルトノ義ナリ 又齊ノ人ハ冷節ト呼ビ禁煙

トモイフナリ

杏粥 寒ク粥青精

飯 青飢飯。桐楊ノ葉ヲトツテ飯ヲツムレバ青ク光リアリ

コレヲ食ヘバ陽氣ヲタスクトヽ

鞦韆戲 半仙戲。彩ル繩ヲ木ニカケ架ヲタテ、其上ニ坐シ立テ其繩ヲ引キウゴカシ アソブヽ

傳燈 漢ノ世ノ政 寒食ニ火ヲ キヨメテ日暮ニ燈燭ニ新火ヲ点ジテ近臣等ニ賜フコトアリコレ寵恩ノ厚キナリ

拜掃 唐ノ開元年中天下ノ士庶ニ勅シテ先祖ノ丘墓ヲ掃キキヨメテ祭ルベシトナリフレヨリ此日ニハ貴賤老弱群集ストイヘリ

時令 此部ニハ三月の時候ふるまひのこと

暮春

三月廿日頃　三月晦日　とうらい末と云

連　吹ぬけ　宗祇
柳さくや　宗祇
ちるや　宗祇
初瀬川　公
柳さくや　弘氷

俳　柳さくや　宗祇
ちるや　宗祇
ちるや　宗祇
ちる

君ガカヘリヲ玉ノヲ敷 遅別スルナリ 到来面谷愁中ノ
月帰去磻溪夢裏山 面谷磻溪ハ道中ノ山
川ヲ云旅ノモノウサヲ思ニヤラルヘシ 簾前春色應須惜世上浮名好是閑 春氣色ハナゴリヲ惜ヲ思フハヅヨ 西望郷関腸欲断對君衣袖涙痕斑 君ヲ送別スルニツキ談 郷ノ方ヲ望ミヤレバ一カタナラズ故郷ノコヒシク君ノワカレニ移袖モナミダニシボリアヘザルナリ

詩 暮春五字對句

啼鳥春游盡 誰知心裏恨 同上
落花雨未晴 已過夢中春 詩礎

詩 全七字對句

如流春色催詩賦 坐情春欲盡花香滿衣巾 鳥空啼

村嶺瘴来雲似墨 愁暮天山ノスカタカハルソ
洞庭春盡水如天 蝶怨風トウテイハルヲキテミヅゴトシテノテクウムクヒラフ
ミヅウミ春色ワキル

詩 暮春之詞 王維

廣武城邊逢暮春汝陽帰客淚沾巾 暮春ノ頃故郷ヘカヘブ人ヲ送テ涙ニムセブ 落花寂々啼山鳥楊柳青々渡水人 此二句ヨク色ヲカタトリ出ス花落ツキテノ山ノ鳥声モモノサビシク柳色ヲフヘテ水辺ヲワタリユク人ノナゴリヲヲシムし

惜春 夫木 野宮大臣

△春の限 △夏ちかし
東路も白雪ふるをいとゝむく しのくへかくさまをいとゝあはれ
連 情ともなぬをたかなし
能 天ヒ公ヒ情ヒ月御子孤桐

春湊 春のあ[illegible]まりてこゝろ意く湊しの字ハ

あつまるこもとあり

哥 新古今　　寂蓮

[illegible]

三月盡

三月晦日　一日ホ四月ニ入

哥 哥苑抄　　行尊

[illegible]

夫木　唯残半日春　千里

一年ノ[illegible]ニ[illegible]

[illegible]

日　両処春光同日盡　千里

春紙ノ[illegible]

[illegible]

詞 [illegible]

[illegible]

花とぞ[illegible]

[illegible]

花のもとに[illegible]

[illegible]

連 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

詩 仝 今孤楚

小苑鶯歌歌長門蝶舞多鶯モナキ

ミ蝶ノトビカフ時ハ春ステニ暮ル、三至リ長門宮モ物サビレキソ

眼看春又去翠輦不曾過 久シク行幸

ナク御クルマノトホリスクルヿモナク今年ノ春モアダニクレユケドモ行幸ノサタモナク君ノメグミヲウケヌヲナゲキタルナリ

詩 仝 賈島

三月正當三十日風光別我苦

吟身三月晦日ナレバ今夜バカトモニリノ春ヲ惜シマルヽナリ 共

君今夜不須眠未到曉鐘猶是春 余リ名残ヲシケレバ今夜ハ眠「ヲ世ヒ曉ノ鐘ヽデハ未春ナリ

忘き霜 ○立春の節より八十八夜をぐれの霜なる事也故ゆ三月中と四月節しのめくとなれ霜と云

草木 此部ハ二月一ケ月の艸木ゝを集めのもの

花 古昔ハ梅ヲ定る一枝開天下皆春など、詩ヨリ用ヒも梅のことなり詩ヨハ多く桃李をさして花といふ○中世より桜の花をいふ○一説ニ和哥ヨハ花といふハ往昔より櫻の事をいふ

櫻 夢見草 あぢさゐ草 吉野草 尋見草 かぎ草 曙草

中華にて此花をいふ櫻木といふものあれども楮桑の類ふして賞翫する月のよハあるを或ハ櫻桃を以てさくらあり桃ハ今のどと本草と考ふるに櫻桃ハ此花なゆすゝ梅なり朝鮮ふも此花るり中古来聘の時此花諸方ゆ多くあるを是てうの聘使の朝鮮人等甚ざこれを愛翫せり海棠の異類ふしてりくい空土のたゝ

その花の美なる事本朝の外ふたゝびなかるべきと見へたり此事唐人にも能く知るゝ宋景濂が詩あり末に載せ

○夫木　野外花　家隆

櫻　うゝ志ぐ〜めげうんぐ〜たゝの野のうのかゝ夏むもうつゝぬ

同　庭一櫻　仲正

かゝ〜ぐ〜や約もかさぬふ彩さやめ　庭もせ水さくうんさゝ〜うる

詞　白。文咲。ちる。神〜〜〇雲花まふ花ゝ雨花と思ひ花の言葉ハ雨かゝ言葉〜〜〜

○非諸正花非正花大暑

○正花本植物春小成分　三句季り

△花の滝△花の浪△むれば△花の雪

△花吹き雪△花の雪△むれ回△花筵

△花嵐△むれ竜△花びら△花とふ比

△花冠△花寄△花の友△花の主△花

の宿△花車△花ぞさ△花軍△むれ入

△堅花△花の宴△花島△花の春

△年の花△弥と花△まさ乱△紫嵐

○寒美の正花春之　二句季り

△花の海△むれ魚△花の稼△むれ奪

△花嫁△花衣△花の神△むれ乃秋

△花の扇△むやう△ときみく△ふん

△花まろが△むれ髪△絃のむ△流れのむ

○他季の正花本植物人

○むれ擣○鮎ふ○若葉の むし○夏ふ

○氷室の ふ以上○冷ふ○二夏ふ

○解花冬上○花の舗○花火秋上

○雑の正花　植物二句去り

○むぐらと○竹の ふ○花瓶○花溶○

花めり○花かいつぎ○作り花○花ぐと

○花ぬ祭○花花蔦○巴河のむ

○正花さいを植物もあるざる分

雪の花○活の花○粉のむ○あれ安なる

○蕊の ふなる○花ふ○花丁ふ

○六ッの花○花番の花

右大暑と挙く餘ハ准之句作有べ

(連)橘花も花のゆきく かが　宗祇

花蝶よ伝せてたく人ハ風もる　周桂

花ハけさ花の声ハ聞く白ひろる肖柏

(俳)我さ花のくを桜ぬ言ふ言水

花と妻ほとてくみの花見ハ其角

花盗ひであるうる夫婦弓　全

三芳ハ花をつく絵てふ島　支静

僕ぐうくくわく花ぬうる季吟

ふ花も花僕小酒うる木陰ハ一笑

花ぬて死とひないが病う那　来山

花ぬいの美嘉ぬとうるくふく　如泉

花ぬさしなのそだ山ふる　常矩

〔髮骨の上を結てこゝ〕思貫
〔月花の味や吸筒〕酒乃友　立圃
〔娘ふも首巻やや〕花さうの移竹
〔親者ハ仰ふあ〕〜ど花幾り　宗阿
〔吉野山世ハの花ハ〕のみ〜〜し　淡々
(狂)西方に浮去のまなさこのハゞ
花もこゝ〜〜もこらやひら〜〜　真柳
〔人多に櫻折〕こゝとらみあれて
あ〜〜梯を枝ふ〜たたゞ長驚子
〔とつきら〜〜〕名ハ枝り白ひら〜
以上三〜〜の花
のゝゞう　行風

(詩)櫻之詞　明宋景濂

賞櫻日本盛於唐如被牡丹
兼海棠日本ニテ櫻ヲ賞美スル一唐モオヨバズ
其ハナハダシキ一牡丹ニ海棠ヲヌヨタルガゴトシ唐ニハ〜〜コトノサクラナキ故ナリ恐是趙昌所難畫

趙昌ハ画ノ上手ナリ真ノサクラヲ画クヿアタハズ春風絶チナレドモ起雪吹香白キサクラノ白ヒ芬々タルガ雪ヨリ白ヒノ出ルヤウニ思ヘルトナリ

(詩)櫻五字對句　同上

名花経千歳　花白交梅樹
寄種開五方　枝垂對柳絲

(詩)同七字對句　詩礎

芳野寒光千里雪　第一花
嵐山春色九重雲　白櫻開
花如解語迎人笑　因花醉
草不知名隨意生　山着色

(狀)催花見文　真字尺牘ナリ

春山 百花 滿開

佳客詩家こゝに花只今盛
吟客成群 不失時以テ
こゝ花人為命 張く歌
共暢觴詠之懷
中不覺自詩腸 怡々
同 為 怡悅
ゆるし五と云 可為怡悅
尺牘 書啓上中下

春山 勝地勝境芳嶺 百花 名花
催花 滿開 爛熳明眉 吟客 遊子
鑑各逸人 作群 雲集 奔湊 絡繹
不失時 未辞枝 不後時 共暢云
侍吟筵 將野飲 同駕 催趣
行馳 携手同歩 怡々 歡躍 歡趣

櫻田 吉野。櫻の苗を植る夫を櫻田といふなり 光明寺

(哥) 建保百首
山風の色吹おろすさゝ田の
苗代水をそそ[illegible]

山櫻 山中ハ多ク花白色 單辨也早く開く品類多

(哥) 家集 定朝
ゆふるゝ立ゆくまゝにやま櫻
花のまゝにくれそばちめる
(俳) 茶りひなし吟 種とも櫻 其角

家櫻 人家ハある櫻をいふ

(狂) 一面ハ咲つゞ[illegible]い哀
の月ハ家先ハ[illegible]の家櫻 滿水
(俳) さゝふるゝさん[illegible]くいへさゝ立 立甫

庭櫻 (哥) 新撰六帖 知家
庭もせに咲ける櫻の咲ちらぬ
○以上三ツの櫻ハ名木ハあらぬ
家ハあり庭ハあるとさしていふ
○次ハ記せる名木。早ハ二月の部有

八重櫻 昔ハ南都のみ有今ハ處々有 (哥) 伊勢大輔
[illegible]への[illegible]の[illegible]の八重櫻
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

(哥) 文應百首　為家

うつゝうる神のえむろの八重櫻
長の日くゝ山ゝ　ふるかな

犬櫻

木葉常の櫻と同
小花穂とます山多

(狂) 行末て木ゝ隠い盗人の
月心もなき犬櫻　貞宿

渦櫻

袖中抄云唐華の雲珠似さ

(哥) 夫木　定家

そやしまうへゝ咲るうゝさくら
ゝ毋のゝ　ふまさけるゝるべし

樺櫻

花樺茶色ゝ故ゝ髮く
又別ゝかゝゝ木あり

長ハ檜物ユ多ゝ用るものゝ　為家

(哥) 新六帖

樺弓矢部の里のかぢ櫻
ゝゝふのゝゝゝる事ゝゝゝ

遲櫻

色少紅く諸花ハ
後ゝ青葉隠れハ

咲く四月新樹ハゝゝ合ゝ事あり

(哥) 草菴　頓阿

おくれて咲るゝ花と見ます　や

(連) ちるなゝハゝゝゝ

緋櫻　小輪ふて莖長くして蒼甚だ赤し　(新撰六帖)　光俊

夕附日梅ふ高や岡のふもとん
る根よろひざくらの花

楊貴妃櫻

重瓣はして中輪あり

(狂)楊貴妃の花は昼なく天のやうなる梅色なり　貞清

右の外墨染櫻・江戸櫻・西行櫻・虎尾櫻・浅黄櫻・雲井櫻・有明櫻・滝櫻・委しくは本草博物筌ふ名木弄ふ花形くしくのと

花笠　(俳)花かさと云せる多似合ん人い泥　其角

花の雪　(俳)大仏のむざうづむらん花の雪　仝

花見酒　(俳)徳利提人いさうやあ花ふこそ　仝

右いろまも花ふまそへろあり季安しくい廿三ヶめ　の所よあり

尋花　(新)新千載　津守国助

はるふとはつ初ろ山
搦ゆ伏ろて　ゆゆ目ゆ見ゆ
家集　泊舟尋花　西行

漕出てたゝの沖ふ見ゆ出せば
まゝと一ひろも寄ぬ雲

花盛　徒然草に立春の後七十五日と期ろ花ろ有れも今ハ甚早し一口の二十ヶ五丁めふ花盛の時をしるす

(新)二永花百首　為重

梅ろそ花見ろ色よ寄ろ紅ろ
ろうい花の日数ろろ

(俳)京紀ろ人い田ふや花盛の桃堂
撫さろ又ゆ雪ろけ岳さろ波文
大和路の梅をちゝもや花盛洛々
ゆや花垣根くの酒ろや　亀洞
ちりけ多ゆ花盛　雪山
(狂)香ゆ寺の扉乃風もやてい
今とさろ花見酒よ仁　宗恒

落花

。山里深山ニ人稀ナル處花の落るさびしき躰云

(和) 家集　西行

木ぬれに梢○とすれるうぐひすの
花のふるとぬるとさそふる春風

夫木　水辺落花　鎌倉大臣

桜むちるそのひろにむ春の夜乃
おぼろ月夜乃かもれ川風

(詞) ちる紅葉ちるもみぢ葉乃花ちる間今ぬれ
禁乃ぬ雪紅葉風。春ぬ雪。花乃錦。
入相。浪乃ぬ波さそ。ちるさそ入。波さそ。
後ぬ雪ちるぬ。ぬ。ちるぬ。ぬ。ちるぬ。
花ぬ雪ぬ。ちるぬ。ぬ。ちるぬ。ぬ。ちるぬ。
多雪。ちるぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
人ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

(連) ちるぬ雪ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

(排) 花ぬ雪を追ひてぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ちる雪ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

(狂) 桜ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

風卷落花輕　惜花風起頻

詩　公七字對句　詩礎

細柳擁壇人迹絶　落照春
落花沉澗水流香　且落花
楊柳青々渡水人　踏落花
落花寂々啼山鳥　覆地多

惜花　花ふ對して命ふもかつる
ぞうにそうの是花を賞ず

歌　後拾　能宣

櫻花白ふ名殘ふ大かさん
惜さへとも思ひ知ゆるかな

夫木　雅経

をぬまとなりぬふのせゝ
ふのれとゆれ雲乃あり

詞　なわおぞ。どうき櫻。ふいくる。根ふ。ふ。身ふ。雲。ふさりあ。ふ。
ふりあるはふ枝のひまうつろふ。
消ふ。春雨。風わし。あ。ふ。
香。おくふ。風いとふ。ふ。ゆく。
ちふとうぐめわ。身ふ。花見ぬ人。
折花。むとうぐむ。ふ。ぐうのふ。
ふぐうのふる。ふるをとむ。

俳　かさや。ふ。むふ。其角

狂　花さへふ名ふいふ。ふ。
ふて。ふて青葉。ふ。可候

詩　惜花之詞　唐彦謙

紛々復此見花殘　今ハ三月ノ末ナレハ開花紛々トメ散リ落テ間殘花アリ人間モ長命ノ者ハスクナキヅ車覚長繩繫日難　今日ガ去テ明日ガ来リ光陰矢ノ如クナレバ早ク老人ニ成レリ長キ繩ヲ以テ日ヲツナギトメルヽハ樓上有愁春不淺　小ナリガタシ樓上ニ登リテノ桃風雪徒闌干　樓上ニ登リテノ闌干ニヨリテ小

桃ノ風雪ヲ見テ春ノ去ルヲ惜メバ愁浅カラズ

殘花

春ハ殘る花と云ふ 夫木 入道太政大臣

春とあさ殘れるはなもなくれなゐ
とうらめしの入あひのそら

詞 △名殘の花 △青葉乃花。
梢ふのうる。風う後ろ

詩 殘花之詞 唐崔惠童

一月主人笑幾回相逢相値且
銜杯 主人家ニ在リテ笑ヒ樂シム コト一月ノ中何ホドカアルカ
ヤウニ偶奈會シタ時話ヲ
リテウサヲ忘レ酒ヲ呑レヨ 眼看春
色如流水今日殘花昨日開 光陰
ノウツリカハルハ水ノ流レテトヾ
ルコナキガゴトク昨日ノ花サクリ
ハ今日ハヤ落チル然レバ酒ヲノ
ミタノシムテスゴサレヨ ーイフ

詩 殘花五字對句

枝上三分落 山齋鳴過雨

園中一寸深 澗對落殘花

詩 同七字對句

好鳥鳴春歌後院 看殘花
飛花送酒舞前筵 眼偏明
短砌雨餘芳艸合 照殘花
小亭風靜落花疎 色猶深

詩礎

海棠

△かいどう 異名 花仙。唐ふもえい

海外ゝ來る花ゆへ海棠と名づく

排 海棠の花のうつくやおぼろ月其角

海棠や嫁ハ芳度月とさゝ 紅

詩 海棠之詞 明張新

雨滋霞襯入朱顏 雨ニヒトシホ
苔ノ色香ヲ
一レソフルコ美人
ニタトヘタリ 月下疑從姑射

還月カゲニナガムルハ姑射山ノ仙境ニ似タリ　最是春工多巧思著將色在淺深間春ノ造化ノタクミ種々ノ妙アリテ苔ニ浅深ノクハレキ色アリ

詩海棠五字對句　同上

蜀彩淡搖拽　弱質不禁露
呉粧低怨思　幽懷欲訴風

詩礎

詩　全七字對句

望中落日青絲騎　箔外風
夢裏東風瓊樹枝　舞蝶飛

海棠故事

花中仙　王禹称。花譜ヲ作リテ海棠ヲ花中ノ仙トシラレタトナリ

伊無香　冷齋夜活ニ載ス楚辭材ト云人ノ詞ニ吾平生恨ルコトナシ但シ恨メレキコト五ツアリ一ニハ鱗魚鮮キモノナレド胃多シ二ニハ金橘モヨキモノナレド酸キヲ疵トス三ニハ蓴菜賞翫ナルモノナレドモ性冷ナリ四ニハ海棠美花ナレドモ香ヒナキヲ如何ン五ニハ我ガ嫡子詩ヲ作ルヿ能ハザルコノ五ノ事吾ガ恨ベトイヘリ

睡花　唐の玄宗皇帝大真妃と呼ひ給ふ妃新ふ化粧して来ラン姿を見ヒハ海棠の睡りたるごとくのさまなりし名づけ給へり

白輪海棠花　白く

桃花　三千代草ハ御酒古草藏モ水出

異名　洞中仙　武陵花　桃　助嬌　一縣花　仙木　蟠桃　客毛桃花

異名　三倫　五渡　陽花　碧桃　招桃　柳郎花　陌上花　桃林

㊇ 夫木延見桃花　俊頼

沿う又そもあやめん山がわの
その人乃桃は花のちをめを

㊇ 藏玉　三千代草

々ゆゑ〳〵流ふうゆてのむ人や
三ゑをの者は名よいたゆん

詞 春風。うりうえず生の桃。三子代。夕日。こもめ。
き。艶る山。天の川。妻見日。碎。岩垣。
潦。皆。糸。二月の糸。はやの彩。
唐去孫。枝ようを。遠山霞。

連 花今日豆雨くもり墨の桃
未業世とやこがの墨は桃紹巴

俳 花錦の桃や金蕊奴竹踊。其角
桃小束て麦まて参る家小移竹

詩 桃之詞　唐李嶠

獨有成蹊處穠華發井傍清水ノ傍
二桃華アリ人ヲ不召トイヘトモ人
苍ヲ慕フテ来リ自ラ蹊テキル
山風凝笑臉朝露凉啼粧桃苍ハ美
人ニ似タリ風ニ逆ヘハ笑フ如シ露ヲ受レバ涕ニ似タリ隱士
頻憑飲仙人路浦長隱者モ桃苍
ヲ改テ喜ビ咲ヒ仙人モ留テ長ヲ見レハ顔
リ見テ路ヲ行クヲソシ還欣上
林苑千歳奉君王宮中ノ桃苍ヲ
以テ天子ノ壽ヲ祝スルナリ

詩 今　唐白敏中

千朶穠芳倚樹斜一枝枝綴乱紅霞桃樹ノ千朶斜ニノビテ芳
紛々タリ枝ニ枝アツテ苍サ
ケルヲ紅ノ霞ノ如シ憑君莫厭臨風看占
断春光是此花春風ニ乗ノ桃
苍ヲ見レバ厭フナシ春光ハ桃苍ヨリ外ニハナシ

詩 桃五字對句

種竹交加翠竹ノミドリ　松葉疎開徑コミナデオル
植桃爛侵紅モノクレナイ　桃花密映津ホニウツル

詩 同七字對句

詩選

桃花氣暖眼自醉　種桃年
モノイロニ目ガヨフ

春渚日落夢相牽　深浅粧
日クレニナムリヨモヨウス

五夜漏聲催曉箭　紅欲然
トキノタイコ

九重春色醉仙桃　滿澗香
モ、ニヨフ

桃ノ故事　王母獻桃　漢書ニ載ス武帝ノ時一足ノ青鳥来リテ帝ノ前ニ止ル東方朔ガ云ク頃テ西王母来ルベシトテ身ヲカクス少ラクシテ王母来リテ桃ヲ奉ル此桃三千年ニ一度實ノル仙家ノ桃ナリ屏風ノ後ニカクレタル竪子此桃ヲ三度偸ミ食ヘリト奏シケルコレニヨリテ世ニ東方朔ハ九千歳ト云ヒ習セリ桃ハ五木精ナル故ニ邪氣ヲ去百鬼ヲ制ス

桃之故事　天台山　漢ノ代ニ劉阮ト云者天台山ニ入テ菜ヲ採ル路ニフミマヨヒテ山ノ頭ヲ見レハ桃樹ノアリケレハ取ラントシテ水ノ深サ四尺バカリナル所ヲワタリ又一ツノ山ヲ越ケル時ニ人ノ女ヲ見ル容顔極メテ妙ナルガ劉阮ガ姓名ヲ呼ビカケルコト下地ヨリ相識レルゴトシ

桃花源　武陵ト云所ニ魚ヲ捕ル漁夫アリ或時桃ノ花ヲ詠メテ溪ヲ行コ五六里バカリニシテ或ル大家ニ男女有テ彼ノ漁父ニ食ヲ與ヘ馳走シテ云フ我等ハ秦ノ世ノ乱ヲ避ケテ妻子ヲツレテ爰ニカクルクレヨリシテ世間ニ出ズ子バ等数モ覚ヘズサルホドニソ

レヨリ何代ヲ歴タルヅト問フ秦ヨリ魏ニ移リ晉ニ代リテ遥カニ年代久シキコトナレバ漁者モ大ニ心アヤシミ帰リテ此由ヲ太守ヘ申上ルニウキ太守ヨリ漁者ニ人ヲソヘテカノ髣髴ノ大家ノアリシトコロヘユキ再ビ尋子サセラレケレドモ其アルトコロヲ知ラズ尋テ路ニフミ〻ヨヒ辛フシテ空シクカヘリシト有

玄都観

劉禹錫ガ詩アリテ玄都観ニ桃千樹栽シトイヘリ

桃

源平ものがたり桃白ふ

赤とび入輪

残雪桃白

八重大輪

白ちぐさ

赤

緋桃八重

早咲ひとうすべにてあり

詩 緋桃之詞

短墻荒圃四無隣烈火緋桃照地春

古城ノ荒圃野中ニアリ桃花赤色火ノ烈ガゴトシ

坐久好風休掩扉夜来微雨已沾巾

桃葉受風美人ノ扶ニ似タリ夜来雨降テ美人ノ涕ニ似タリ

敢同俗態期青眼似有微詞動絳唇

桃花ノ礼容世俗ノ如ク昼ニ動テ声アルヿ美人ノ唇ニ似タリ

盡日更無人ノ唇ニ似タリ

附井念此時何必見秦人

終日見テモ見アカズ古郷ヘ帰ル心モナシ又桃花源ノ桃ノミ好ニハ非ズ

李花 異名 勅苑 道傍 知名 ひもろきを花 識玉出タリ

為家

新撰和歌

さくらばなそふ雪くもるみ山嶽乃

拉嶽のもりくの花咲かゝり

詞 汀に山ぶり。咲風もそよぬ

雪を見る

詩 李子之詞 唐太宗

御流桂圃成蹊正可尋 日夜谷頭ヲワケウ鶯啼ヲ苔ヲタヅヌ密葉多蝶戯

晩花心萼ハ葉メクレニナキ蝶ハヨク咲ノ苔ニ戯レ

李徒獨来教愁情相與懸 李ノホウ苔

道ヲイク度モメグリテ自明無ナグサンズ心ノウレヒハレヌソ

月夜強笑欲風天 ヤミナレドモ苔ノ白キニテアカレシ心ヲ取ナヲシ風ハ笑フタカレカレ風ニテ苔ハチルーイカ

減粉與園籜分香沾渚蓮徐

妃久已嫁猶自玉為鈿 美人ニカサリニ見タテ、苔ヲホムルトリ唐李商隱

詩 李五字對句 同上

園裡迷明月 月ノトクキレイニミエル 葉暗青房脱 ハカレゲリダリ

林頭宿白雲 花明玉井春 詩碑

李七字對句

近紅暮看失燕脂 自無言

遠白霄明雪色奇 李花香 スモモニホフ

石筍街中却歸太 花落時

果園坊裡為求来 白玉堆

楊梅花 花りゝ早く苔咲葉もふとり木榮ル

実のゝず松りゝとゝ木立のびやゝゝず寅も實も酸ゝ

○実の大ィゝゝもゝゝゝゝゝび植ゝ味ゝゝ

杏花 新撰六帖 衣笠内大臣

(詞)て匂ひそ久見ぬの家園ゝゝぬゝゝりゝの花

詞 めいそ。なのゝ。匂ひゝゝゝゝゝ

非 おそるべき行いあんどけの色貞徳

詩 杏之詞　唐 温憲

團雪上晴梢紅明映碧空 白雪杏樹ノ梢ニカヽリ杏花店ノ色天ニ映ス

夜ル風吹テ店カンバシ香風起夜キハ杏花ノニホヒシ村白雨休朝夜風ニナツテ雨ヤミ今朝ニ至テ見レハ一村雪ト成レリ 静落

猶和蕊繁開正蔽條 夜雪杏樹ニ降テ花蕊ニ並ビ恰モ杏花ノ繁ク開テ條ヲ蔽フカ如シ 淡然間賞久無以那嬌饒 静ニ居テ杏雪ノ景ヲ賞玩スレ厄飽キ足ルコトナシ

詩 仝　薛能

手中移得近青樓 枝ヲ折テ青樓ニユクナリ

活色生香第一流 杏花ノ色白ク二ホヒモ第一ヘ

誰知艶性終相負乱向春風笑不休 杏花美ナリトイヘ共「妖」ニ近ツクレハ艶色相子ダムヤラ風カフチ

バイナルヲワラウテヤミス丸ハレタヅ

詩 杏五字對句　同上

暖酷松葉嬢 晩色連荒轍

寒粥杏花香 低陰覆樹碑

詩 杏七字對句　詩礎

忽憶華時頻銘酊 杏間遥却尋醉處重徘徊 温胭脂

寂々孤鶯啼杏園 獨倉晴寥々一犬吠桃源 已繽翻

杏之故事　碎錦坊　斐晋公午橋ト云所ノ別業ニ杏百株ヲ植テ碎錦坊ト名ヅク

葡萄花

林檎花 要 文林郎 東花 大小二種アリ

梨花

異名 清艶 淡妝 玉霰 玉雪

種類 棠梨花 野山ニ生ル

浦梨の花 ハ、の浦トテ伊勢の名所ヨリ出テ

妻恋の花 ハ、ヨリ三秋の

(哥) 夫木

やまとうた伊勢をとめ

枝ぬかれる山梨の

為家

(詞) 移ろふ。えもいはぬ。なつかしう。

とをみ。山花。彩の妻をとめ。

生ひ。みし。書みし。ろ花を。

(連) 雨や。夕行山みち。の朝ぼらけ。

(俳) 梨花。木ぬれ。を。

梨の花。尼。

あ。花のうつ。梨花。

(詩) 梨花之詞

露晃行春向若耶野人懐恵欲

劉高

来シト欲ス 東風二月淮陰郡唯見棠

李一樹花 淮陰ノ四ハ古ヨリ梨樹多シ千本アル家ハ大名トヒトシト云傳ヘリ

(詩) 今

丘為

冷艶全欺雪餘香乞入衣 梨花白ク

ウルハシキ白雪ヲ欺テホコル二似タリ其香氣餘分ニ多シテ人ノ衣服ニウツレリ

春風且無定吹向玉階飛 梨花ガ春風ニ吹カレテ玉階ニ向フテ飛ブト云フヲ以テ新臣無功ニノ恩恵ヲ蒙ムリ天子ニ近クト云ニ喩テ云リ

木瓜花

(俳) 木瓜 てんさく 歌 山店

(狂) 張ふ毛紙わ。て木瓜の色こそ。

桜一やそこるさ。の。さづき。蝶鼓

木蓮花

木 (俳) 木蓮 蘭 木ぶし 花 搭井

胡桃花（ウ）　くるみのそべ　紅ひそ

敷多つ〜この敷
そかくめり　知家

辛夷　木筆　迎春　侯桃
紫菴　紅蓮

四手く成〜。別ハ重ノ花咲ノ形
幣の〜し　故ハ花そ云　金二花

（万）桑　ちくて成揚ノ　ちこ成ノ水
ムせぐさをなげくくろ　為家

（俳）辛夷　うれ　文舟
蝶〜やら路〜　ぬ花ふ　の森市隠

（詩）辛夷之詞　崔迪

緑堤春艸合　王孫自留玩　堤ノ春ノ
クサヲツムトテ　ノ人々アソビニ出ラル、　況ヤ有辛夷花
時　興芙蓉乱　ヲリシモ辛夷ノ
サカリニテ水ノ
チモノハスノ花トヒトツニミダレアイ
タルケシキヒトシホヲモシロク臭アイ
リトナリコブシノ花ハ
ハスノ花ニヨク似タリ

躑躅　山石榴　羊躑躅

（史）草　家集　躑躅為山光　西行

はしぢさく山のいろゝゆゝしくもえて
さゝ〜いろそのの名のうるはしけり

（詞）紅。こぞ花の色。咲。白つゝ。
はくぢ　海辺　さゝ　のうら　白つゝ
る岩　ぶつゝ。ぶ花の　ぶ。山
路のつゝ　野　松のもつゝ。さく
妻木ヨ　駒　ぢのけ　夕日。さゝ花。夜　山
娘の神　はくぢが　峡。深山つゝ。

（連）もゝ　ぶ　ぶつゝ　宗因

（俳）小名　ぶ　ぶ　山其角

（狂）　ぶ花の　丹解

（詩）宣城見杜鵑花　李白

蜀國曾聞子規鳥　子規ハ名ハ杜鵑和名ホトヽギス唐ニテハ三月ノ末ゟ鳴ナリ　宣城還見杜鵑花　杜鵑鳥ノ啼ヲ聞テモノサビシク思フニ又杜鵑花ヲ見ルニモ古郷ヲ思出ス　一叫一回腸一斷　鳥ヤ花ヲウルニ我ノミ流労スト思ヘバ腸ヲノキルホドニカナレキナリ　三春一テ三月ニナレバ憶三巴　三春ニ春ヲタノシヘズ今三月ニ此所ヨリ三巴ガ見ユレバイヨヽ古郷ヲ思フ

詩　杜鵑花之詞　張籍

五度溪頭躑躅紅　タニノホトリニアカキハ、シ、花サケリ　嵩陽寺裡講時鐘　山寺ノ講時カ子キコヘル山中ニヾカナルテイヘ　春山處々行應好　一月看花到幾峰　春ノ山路往モ花見事ニアルベレ一月ノ内毎日花ヲ見アルカバ幾バノ峯ニカ到ラントオモヒヤリタルナリ

躑躅品類

姫つゝじ　(桃)　垣ろゝ絡も貌　くや姫つゝじ　一貫

羊躑躅　吉野ニ多シ遠く見ゆる蓮花の如

花黄　(哥)　新撰菘　光俊

哥　我宿の谷むらひろる岩つゝじ　いろ〇はゝそもうくやなる

映山紅　葉少シ圓シ花赤シ又小映山紅アリ

花を開くこと尤遅　或ハ白花の物アリ

豊映山紅

○白雪さうまん　中アん　○やゝ白く丸ゝあつまり咲く　○せいがいと。赤小輪　○みゞれ捏々。紅さくれ咲　○江戸万葉八重うすいろ大アん　○ハッゝ。紫大アん　○ほうがぼうすあ紅ゝ小アん　○雲井赤　○峯の松風　白紫　○重八だん

○櫻川さくらの中ノ人○あい雪白小さくん○花車むら
さき大さくんきれ咲○ちやむ
ろ白むらさき飛入さくき大さくん

藤 紫藤 さぐり藤 さぐり花 松見草 二季草

哥 家集 橋上藤花 顕季

うすくこくのぐるふ白へちりえまで
ちれのこる〜に咲くる花ゐる

真蹠百首 藤花始綻 為家

紫藤のかくみふくはふちるこゑ
色ゆえそむ新たごのうら松

詞 むらさき。ちる。咲。白へ。ちる。

浦田子ゆく〜花。たごのうらの春さく
白へ。池他の花浪。新つる。はぶ深き
庭ふもとゐる野 春日祥。ふぢ花

きとゐる松 里の花波。来る世うくる。浪
ゆく庭ゐる松風。ちれ松。ちや新。

松のこずゑにさくこゑ。風白へ。ふぢ
松風 由緑 ゆくり花。花はぶ。ちるこゑ

ちのこゑ かく〜花ゐづ〜。
の。大川。のべの花ゐ。花づ〜。山ゐ
本ゐ。雲。ちのこゑ。他ゐの花ゐ
ちこも波ゐ新ゐつ〜。花ゐ枝。花ゐる。さ
ぐり花。花ゐ。花の九。ち〜花

連 花浪ゐ。ちこも。ちの。ふぢ花の白へ。ふ昌比

俳 白花を弧味ゐ。ゆ。ゐ。其角
長くし。のゐ。ふ。ゐ。ゐ。ゐ

美溪ウツリテヨシ

詩　藤花五字對句

野衣裁薜荔　松石倫空古
カヅラノコロモ　ミヤツルキ　ヒトヘニクウコ　ミツモイシモフルビタリ

山酒醉藤花　藤花不計年
サンシユユフトウクハニ　トウクハスカヅヘトシヲ
フジノハナノサケ　フジノハナノトシヲクレクナル

詩　仝七字對句　詩礎

長蔓纏來山徑樹　碧侵衣袂
チヨウマンマトヒキタルサケイノキ　ミドリヲカレコロモ
フルガノビテ山ノキニマトヒツク　ヒタ

垂花拂盡石橋苔　花低枝
スイクハハラヒフクスセキケウノコケ　ハナタレテエダ
ハナタレテイレバニトハク

仙人棊局埋幽艸　留美人
センニンキキヨクウヅミユウサウニ　トムビジンヲ
ゴバン

閑士禪扉閉古藤　院隔橋
カンシゼンヒトヅコトウニ　インベダツハラフ
カトノト　テラ

妙術

藤の花長く見事ニ開く法

藤の根へ酒とくけ或いい酒の糟を入るへし藤能くれこう花長く美しく咲なり後英の下へ盃ニ酒を入三寸程あいぐとあけて次弟い盃をさゝるなり花長く見事ニ咲

月季花　日月紅　不斷花　紅闘雪紅

ちやうきくわん　花ゆゑくふ

ようり長春の名あり春ゆゑも花多し然るを殊ニ春と云名あれバ季とも

詩　月季花之詞　宋　韓琦

牡丹殊絶委春風　籬菊蕭疎怨晚叢
ボタンノシユセツ　ヒヤウ　ノ　ヒ　ヒ　ヒ

石楠花　唐人の詩ふくあうげ

葉はびんちやうげみ

似たり　詞　殼山。分入峯。小峯。俗の殼山。篠分る。乃山入。大峯。俗のちくのくのつのれりまそるへきろまめえ仙かんり食もろこのうり

俳　山茶は左ろくてもすれ不福む　頼高

沉丁花　瑞香　春是とさく木　麝香　にして能活を

高さ三四尺花丁香の如くかして紫既か開けば淡紫となる

俳　ま繁こを梅にさる沉丁花風光

狂　竹垣を殼のうめ花不咲てそ匂ひをとむる

沉丁花小未得

山吹　順の和名抄小数冬

この字を書く朗詠集に公任卿も此字を用ひ給ふ本朝にいこれよりさぐべきみや本草を以て見る時に数冬にふさの蕚の事と正字は棣棠。異名。酴醾花。玉蘂。銀葩。春紀念草。鏡草　面影草○菊の花は黄色を本色とす良峯の宗貞は山吹の花は白きを正色とす良峯のやたねくとくとそ

ふらをしてして此哥をろ紀をつんと赤うる陸奥山よこぐ

なりり又いとつくきの汚代さろ

花咲此歌によりて山吹をよみ合せたる黄色の事なり

家集　定家

詞　咲ちる。八重。いとあ色。ぬる

枝　川岸の山吹。新うつる赤の枝

をあらふ。波ふらうあく。井手。

流れ清の玉ちるかくる。流れ岩根

れ岸。泡。池の山吹。池の岩根ふ

里。里。井手。井手。里。

露。山吹の春をこうよ多。山吹の

のたぬ。垂れ。ぬ。ぬ。ぬ。

さくあるる。金こがねの花。○陸ぐ花。垣庭。蛙

[illegible]

(俳)山吹の散る駒ふる[illegible]

月雪に山吹花の素[illegible]

(狂)咲ぬ八重山吹の色も甲州[illegible]

きり 藤原秀直

小米花 鍬形 屬 苔

白き花こまかにて[illegible]

(俳)去風のふくひろまる小米花 其梅

(狂)それでさくもの花の[illegible]

小米の花ぬれ[illegible]

五味子 玄 支

哥よい玉

(哥)新撰六帖世紀[illegible]

木通花 通草。蔓草。花紫或白さもあり

花白紫の両品あり

天南星

令法 藤の若葉は事もいへるもと一種あり

山年ふい飯まぜてくふ大な

民をすくふ[illegible]

春蘭花 獨脚蘭。野生も花葉共蕙に似

道灌草 木藍子。愷児。長較草。

この葉はごくうすみどり

色あり苗高サ二尺余花を

三月藤なでこのごとく花か

ころよるふ及んで房大きく

るるく昔道灌山に生ひ出し

と採て藥にも用ひ故一名と

淫羊藿 仙靈脾 放杖草 花白紫両品有

春菊 高蒿 高麗菊 秋にも同名あり

(俳)内[illegible]

東菊　花菊ハ似て淡紫色　楔花　花梅ハ似て小し

櫻草

種類数多あり　○鞍馬さくら草　いろ少　○紅裏　表ハ薄色うすく紅紫うすくてうり色ハ濃　○濃紫　○咲うけ紅白とび入　○紅軸　濃紫　白油　○源氏薄紫　少し色

旌節草　△九輪草　△七重草　○櫻草ハ似て花大へ紅白紫あり

海老根　△化偷艸　本名山宇波良

荒世伊登宇花　花こき紫色

丁子草花　葉柳ハ似て花丁子のごとく浅葱色

仙臺萩　萩ハ似て花黄へ　○首宿草　大和本草ハ出

華鬘草　花形クシヒゲに似る

碎米薺　蓮華花　五形　ともかく俗ハ△げんげ花といへ

母子艸　鼠麹　米麹　鼠耳　茸母　黄蒿　香草

無心草　佛耳草　能　むるびざるくるのとそくくやくくこ艸　良貞

妙術　治痰嗽術　母子草花を採てなどの代ハ用ひ妙へ

小粉團花　花の形粉團花ハ等へてちいさ〜

馬酔木花　三才圖会云能繁茂とハ高さ一の二三丈山谷ハ有春　小白花さく　馬此葉を喰ハ酔と云　蘇枋花

紫荆花　○赤色と深る木しい別へ　能　一下剛のたや蘇枋の花異り　里香

荷花紫艸　能　招とうれしばるへ　ゆゑや蘇枋花雙

白茅　茅花　花の形白又て稜さ列　ほそうるづし根を美蘭根と云

哥　新　乃の〳〵乃之出れつゝ　根てあて　うゑひゑゝもゝゑゝ　知家

詞　生ひそうつゞを活る。和子虫。あび虫

俳　迷ひ子のつゞを拾て活かり　青玉

芡花　雞頭。雁頭。水蕗。葉すくり大ふ花紫あり

馬藺　葉長サ一三尺幅三三分花六瓣淡紫色小あやめ似す

眉作花　蕚ハ鬼おさし。花乃形ち眉拂ふ似たる故名づく一説ふ鬼茹助くゝ

俳　壹山も二ッ拔くてまゆ作東起

○ちぎみハ小菊ハ鬼の二種ゆゑ大ぢさ鬼ぢさみとも云俗ふ鬼の眉拂ともいふ

又古書ふ美人艸の事ともいへども如何とも定ガたし美人艸の事ハ冒頭沒

海金沙。ぶぶる。ぶぶるぶ。ぶぶるぶ。

線ぶるしゃ宿根より生ずる

ぶぶ草ぶ莖甚さつゝ

堇　若堇　若菜　俗ふ相撲草と

いふ花ひゝさいろあり

(会)堀川百首

むらゝ花ゝいとど垣根のあれふ多り

ほゝぢおもゝぢのもゝ花ゝ

(連)ゝゝ花ゝ

(非)新あげぬ蕗の薹すゝ

畢ゝ花ゝ若ゝ花ゝ

(狂)ゝゝ花ゝ

茶師の意乃はゞすゝ

金盞花　長春　花金紅色　大サ指頭の如く形壽ふ似

槙檀花　木李　木黎。花五弁　淡紅色外國の花欄ふ爲

黄精花　葉竹ふ似て尖ゝ花青白色実ハ黑して黍粒の如

三月大根。楊花蘆蔔。春日葉と食ふ花淡紫

櫻桃　花梅のごゝ少ゝと白葉四ゝ尖り毛あり

梅若葉　新芽　秦椒若葉

蕗苣（俳）あのそう三百三文や蕗　蘭　若荷

うん蕗さう拔で　そうが雲　貞德

三月菜　春時葉を食ふ

若狐　蕗の葉　**蔀**　蒂蓂　治毒虫方

とすりて付る即腫

胡蔥（俳）あさつきもそうハ　さゝ死白拔ゝ　岩翁

櫻海苔（俳）花淡の嵐やうなる　さゝのう　風鈴軒

茶摘　茶を採の時分早き時い味全うゞ遲きい神散ず

穀雨の前五日を以て上ゝ後五日ゝれ小次再五日又ゝれ次く終夜露よりまてゝゝと上ゝ日中にゝる紙下ゝ雨中にゝるい

ゝゝ　かさ茶さく茶

（宗）春雨集　雲ゝる雨降ぬるふ

拔てゝく　梅ヶ尾山のまゝ乃茶ゝさ

（俳）世ハ彼月花ゝる茶つゝふ　里

ざ手夕日ゝ重吾　**青月茶**　昔此製有今無云

手始　つゝも

綿時　八十八夜と五六日見か

（三月四月）　けてまゝゝと上時と

ゝ八十八夜と過て、やゞてよく

を下時ゝすそしゝう段々

勝手次第弟ふ蒔なり一月も早

ゝゝに去ゝゝゝいゝゝも五月の節

まゝでもまゝゝおそうえいさゝ

てもゝゝす（俗）○白花のか

ゞゝ黃花のかゞゝ紅葉綿赤ゝの

大ゝゞいゞ種類多是ゝて好種子

種植　此月種を蒔べきもの

西氏　南氏　蜀黍　玉蜀黍　**葱**　葱花似　烏芋　豆豆　豆豆　此月中旬まで　黑豆　豌豆　**菜豆**　扁豆　赤小豆　刀豆　胡麻　**薑**　眉豆　黍　石竹　地黃　蕈

麻子　荆芥　香薷　茜　胡蘆
葡萄　蕓薹　沢瀉　茗荷　此月苗を仮りよ今ちうつりゆくべし遅くれて日強くるゝに拘れやらず肥つちようわの門土をよりしくす

移載

仙蓼　芭蕉　秋海棠　芋　大角豆
橘　冬青　木槿　楮　是ら此月うゑてもよし

接木　杠樞　椹柚　香橼　等清明の前後ふまさてよし

生類

三月一ヶ月の諸の生類をあらす

呼子鳥　古今三鳥のひとつ　ありさぬくの習の

あしびたゞ深山より鳴て物ゝ〜古今
き鳥と心得てよしば〜
の哥によりてあはつるをくまさハ
呼といふるんふもよみいづるをう

赤人

(三)　夫木

我せこと手もとしの山おろをとう
君よびうへせ夜れ山けぬ〜さ

日　曉呼子鳥　左京大夫

夜とのこゝ秋をふくれをよみる
人もちるへめたのく光のそう

麥鳥　(四)　語所の麥ゝ　引
そのくまふ麥鳥　仙髓

殘る鶴　二月ふ引きうへる鶴の
此月まで殘り居るゝ

雲ふ入鳥　鳥沖雲〜も云
鳥帰も同ド

事あり鶴雁鴨及びりろ
くの鳥の古巣より帰り去の
心かり天津雁とゝいふもよう所
あり雲より入鳥い哥連俳とりに
三月盡古巣へ帰る心を結び侍る

津牛國基

(五)
落る雲にかく玉づさとゝはゆるゝ
ゝ〜ゝ〜ゝかへるかりがゝ

(雁)　名ハ雁ゝ入々ゝ不二聲一音
とりきゝ鳴さ　ひとりれり紫式部子

鷓鴣　和朝小記渡鳥ゝ背
ふ紫赤と交る羽あり

ものの前ハ白さまん丸ク毛ハ
ヤうハ所あり南方の國にあり
東南へとべて北西へいとたろうり
その声ハやこくくるくゆへ名付と
ろう寒氣を嫌ふ鳥よて日ハ行
方へくと向ふてとくぶ霜露を畏
ろるゆへ朝の日出ざん内と夕暮
ごとハ出ること稀なりさぬく
夜分ふとぶ時ハ樹の葉を背上に
覆ふて飛と雀豹が古今注ハ見う

(俳)ふるこゑ忘れぬ仏ぞあてぶ落ぶ仏白飛

(詩)鷓鴣之詞　鄭谷

暖戲炉無錦翼斉　鷓鴣ハ寒キ
キラフ鳥ニテ暖ナル日野辺ニタハフレ翼ノ品
ウツクシキコト錦ノゴトシト
流應得近山雞　シャコノ風流ウツクシクシテ山
雞ノスガタ雨昏ニチカシ
ランスルトキハ青草湖ト云フミヅ
ウミノ辺ヲ走スギテ寒ヲサケルと
花落黄陵廟裏啼　三月ノ末ニ廟
ノ裏ニテナク

コレ春ノ終ルシルシナリ黄陵
ト出スハ青草ノ對ニスルヲ　遊子
乍聞征袖湿佳人纔唱翠眉低
鄭谷征役ヲ蒙リテ旅遊ノ身
ナレバ鷓鴣ノ啼ヲ聞テ古郷ヲ
思ヒカナシミナミダ衣ヲウルホセリ
美人ノ哥モ自然ト眉ヲヒソメテ
モノウナシ　相呼相喚湘江曲苦
キテイナリ
竹叢深春日西　湖水ノホトリ竹
日ノコロ啼キサケブヲキナ
バイヨくモノカナシキトシ

(俳)今月食用可　蛤ぶすてくい
海辺ニて取る事とゝるくいろ
(句)秦今を多ろ二見のうらの蛤
貝あるとそ功ぶくりけり　西行
(俳)雀いもうぶ妻名付ろ其角
(狂)丹波山ハ栗ゆゞる秋ハあるとど
伊豆浦の春ハ
くゆゞり　淨久

ゆゞさうぶ　櫻貝(俳)山伏や
貝長吉　櫻魚川魚なり　櫻魚

(能)筑波ゝ義かう　てやさゝゝ魚東起

櫻鯛　櫻鯛　鬣

(狂)秦　橘朝花の名ゐやも御の　ゝ成なまてやゝ人ゝゝ

(連)まゝつゝのかゞ山ぬれゝさゝ朝永澄

(能)沼竿てゝゝゝ　鳩溪

(狂)この汀菊の酒若む秋いわまど　この海をふゝ　重頼

柳鮠　形柳葉に似うゝ故名づく又時の景物と賞美の詞共云

柳鰈　俗ふ牛の舌　ゝゝ魚ゝ

若鮎　鱸女　溪鰡　小鮎　汲鮎

(狂)新六　山川のゝゝ　ゝゝ

(能)ゝむゝゝ　芳野のゝゝ　青饅　木芽ゝ　味噌和　贈ゝ　鰈常信

上柔　鮎の上ゝ　柔ゝ奥ゝ取る具ゝ上り柔ハ　のゝゝゝ　逐下して取ゝ

(狂)夫木　ゝゝ　ゝ　ゝ　

東南へ行ハ日和晴ても曇りても
南風吹出せば雨と成る○南風或ハ
東南より大風吹出せば曇らす
そも頓て雨と成る○暴水出ル
今年中風雨後一是と桃花水と云
○暖かなるべき比寒く雨ふるく

占候

日蝕あるべ大水と志るる
甲寅甲申乙卯丙巳丑辛
寅壬巳以上の日に雨ふれば米價
貴し○辰の日雨ふれハ百虫生ず
○上半月雨ふるハ
魚多く捕るる

養生

此月肝の
臟氣伏し火壮水死鹹を食し
肝い臟を助くべし發泄し鬱いむ
西北の風ふるべし湿地に居る
こと勿れ

沼中暑

今月辰の日絹
の袋にうどんの粉を入て風の
吹く所に掛け置き夏暑氣
あるる時水にやくて服べし暑ら治と

三月飲食 料理献立

物忌

小蒜 雞卵 鳥獸の五臓を
まのらつるべし 非此月食す
べし熱病好 今月中ハ牡蠣
を忌べし 物物を食を可す

料理

汁

たうぶ 大推葉 たんぷ
やさぶな 綠菜
がん うど あさ 干大こん
ちさ・山椒
やさい ちさ

清汁

塩がま すさのこ
すぐさう
つくし
大根 むかご
むかご
さすご
よめ菜

鱠

大こん 貝 うど
さうが
さとふゆ
たで
うど
まるげつ千
さうが竹
まて
きすご
葉せうが
生さうが・葉せうが
ゆの葉
さーミ酒
差味
たもやだい
かも
海ざうめん

煮物

竹のこ 梅干

小くり 長いも 竹のこ なまぐ

さけの皮 小くり こんぶ ごぼう うど

椎茸 いせえび 干ぐり いか

赤貝 丸ゑ 小くり

たい 長いも 竹のこ

生ぶ 糸かう

生ぶ 竹のこ

和會

物

まて 吉野へ

いか きのめあへ

田つくり こぶでめ うど

よめな 山椒

吸物

まるだこ すまし

たい じんぶ きのめ

いか こんさく こくり

のり 柚

精進

汁

小ふび うど

ちくわ ふんた

清汁 山の芋 白 清酒 あげ 緑豆もやし

清松茸 すいせん下 のり

膾

大こん あげふ 赤いこけ こくふ ゆき せうが

千大こん こくり 酢

きくらげ ぜんまい いいこけ せうが

あげふ こんにゃく れそつくり あさつき こけ

差味

ゆでくず 岩こけ こくふ 竹

煮物

竹のこ 梅干 大こん 赤いこけ 生こんぶ

新ぜんまい 梅ぶし 大くり

和會

物

ちさ うし あへ

くうこぎ どま あへ

ふんふやく なまく ゆりね くろあへ

鳥

ぜんまい ひーこん

魚

ます たい こん こぶ

青物

ふさ。うど。生。そらまめ

松菜。さや豆。しめじ

こので。ちさ。くこ。こうね。ぐり

蓴菜。ゆきまんそう。生ぜんまい

やこで。こうた。そうちさ。くりぎ

こうげのこ。杉菜。ふふく。ねいも

えびくん。花柚。よりげ。こんぶ

ぜそ。竹のこ。ぐこ。ぐり。萱草

ちぐうろぎ。木の芽。こしあぶら

うこぎ。をぞく。ぐこ。青柚

すぐうひし。水くき

あさけき。ひらごぼう

三月用意の品

たよ ちす

葉つきあぐ

蓋屋　菊の實蘭のおほひを
とり去るべし

蹄鼠術　おのへ午
の日鼠の尾を斬て血をとり
屋梁にぬれば永く鼠来らず

妙術

辟井　遁百虫法　夜
分雞鳴に野黍と炊
き其釜の湯を以て飯を入る
器の置所鷹等と井のかくし
めたあまねく洗へば蝶百虫の類
井の近所あるへ近づくことを
極て驗あり

絶蜘蛛法　螺螄と
取て水に浸し置即ち入日其
水を墻壁にそゝぐべし長く蜘
蛛なし

白髮去術　三月八日
十日十三日此日早朝ふおそて
東の方ふむひて白髮とぬ
くべし跡より生へる髮黍く
黑くあるべし尤若き人乃白
髮をとることもまた妙あり

李嵩
記解 改正月令博物図 春部